

にちだん EXPRESS

1992 January No.4

マイコレクション・風車／香りをつくる快適なオフィス環境

豪商の経営学・蘇我理右衛門と住友理兵衛／時代を読むデータファイル

経済随想・竹内宏、小林三保子／にちだんサロン



イタリアのクリスマス風車。
ローソクの火をともしると
風車とエンゼルが回り、
細い金属棒が鐘を
打つ仕組みに
なっている



宮城県唐桑半島にある
御崎神社の
土産として作られた竹製風車



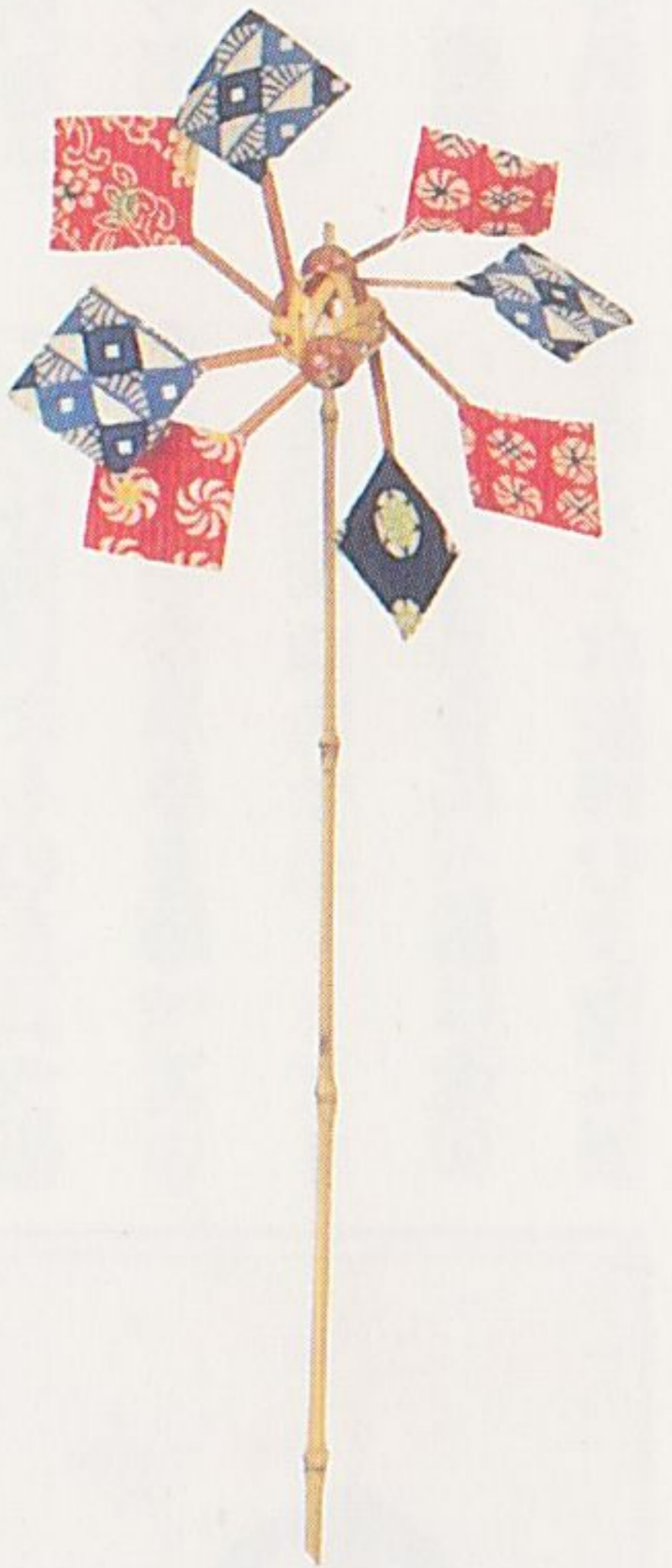
千代紙と竹を使った
風車は温泉地や
お祭りでお馴染み。
右は福島で



愛知県小坂井町の菟足神社の
風祭で売られているのは、
米俵駒の風車。
後ろにある小鼓が音をたてる



竹製の6枚羽根の
風車は松本で



軸のところが
竹籠になっているのは
日本独自の職人芸



My Collection

かざぐるま(風車)・大和屋 巖さん

JR埼京線十条駅から徒歩七分で、東京家政大学の正門だ。ここは、江戸時代は加賀前田家の下屋敷だったところで、その面積は後樂園の七倍ともいわれている。ちなみに、東京家政大学の創立は明治一四年で、創立百周年を記念して昭和五六年に『百周年記念館』が建てられた。そして、記念館の四・五階に「生活資料館」が完成したのだった。

生活資料館は創立当初

から収集してきた

資料をテーマご

とに展示するも

ので、服装関係か

ら食生活、児童・育

児関係、民俗資料など多岐にわたり、生活文化の

資料収集センターとして意欲的にとりくんでいる。



風車の収集をされてきた大和屋先生は、生活資料館

にそのコレクションを全て寄贈されてしまったという。

「自分で持っていますと場所をとられますけど、ここなら安全ですし、いろんな方に見てもらって役にも立つし、と考えてお願いしたんですよ」

そんなわけで、私たちは生活資料館にお邪魔して風車のコレクションを見せていただいたのだった。

父が作ってくれた風車は

ブリュッゲルの絵の中とそっくりでした

私たちが風車と聞いてすぐ思い浮かべるのは、正方形の色紙に切り込みを入れて、彎曲させた四枚羽根のものではないだろうか。そしてもうひとつは、もっと単純な二枚羽根のものだ。大和屋先生にとっては、この二枚羽根の風車はことのほか思い入れが深いのだ。

「風車との最初の出会いは、子供のころ父が作ってくれたものです。ひとつはブリッキの傘型のもので、煙突の継ぎ目に針金を差し込み、煙突を取り巻く上昇気流

で回るもの。もうひとつは柁まさの上と下に互い違いにはがきを貼ったもので、この風車ではよく遊びましたね。ところが今から一〇数年前に、ピーター・ブリュッゲルの『子どもの遊び』という絵本を見ていたら、父が教えてくれたものと全く同じ型の風車で遊んでいる子供の絵が描かれているのを発見して、びっくりしたのと同時にいいしれない感動を覚えましたね」

ブリュッゲルは、北欧ルネサンスを飾る油絵の巨匠として高名で、今から四二三年前に亡くなっている。四〇〇年以上も前のヨーロッパの子供たちと同じ型の風車を、父親が教えてくれたという事実は、大和屋先生にとって文化の伝承や人間の創造性を考える上で貴重な体験だったようだ。

いつか風車について

本を書きたいですね

大和屋先生は「簞笥の引き出しの中にいっぱいあるものから、少し持ってきたんですが」といって、バッグから写真や切り抜きなどをテーブルに広げられた。

「この写真はベネチアの祭日のときで、窓という窓に風車が飾られているでしょ。これは私がスペインで見つけましてね。もう嬉しくて大事に抱えて帰ったものです。こっちの写真はテレビで放映されたものを写したのですが、沖縄では八八歳のお祝いとき、アダンの葉をさいて八の字に曲げたものを二つ組み合わせた風車を飾っているんですね」

という具合に、話は途切れることなく弾むように展



左からドイツのクリスマス風車、でんでん太鼓、オランダ製、日本の竹製風車

大和屋巖先生は、北海道生まれ。元東京家政大学児童学科助教授。日本水彩画会理事。現在はカルチャー教室で水彩画講師として務めるほか、国内・外に題材を求めて作品づくりに専念しておられる。写真右下は北京の風車

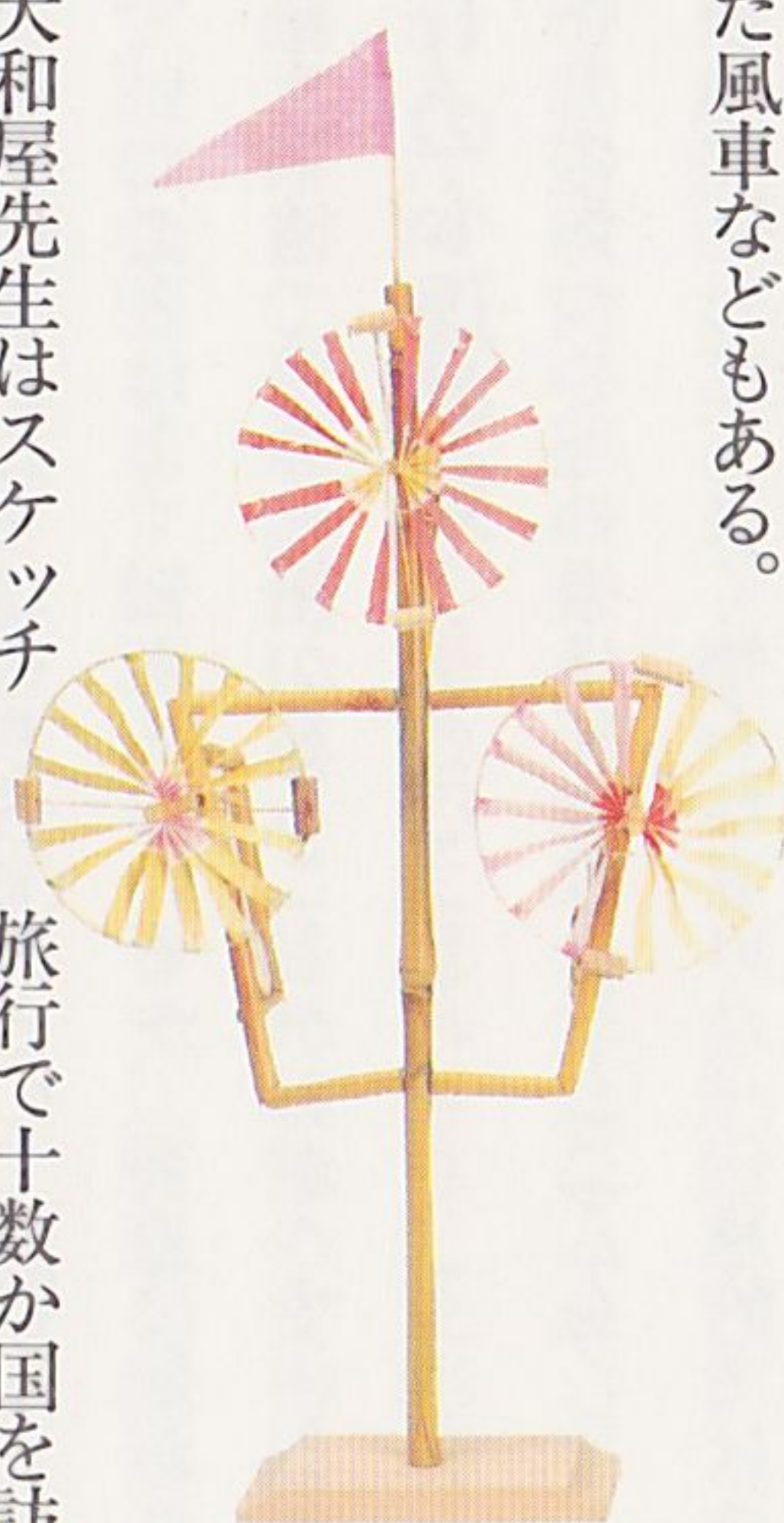


写真：友野 正

開していくのだった。その様子は本当に嬉しそうであり、またひとつひとつに限りない愛情をお持ちなのが伝わってくるものだった。

実際に風車を見せていただくと、素晴らしいものばかりだった。私たちにあって郷愁を誘う竹や千代紙を使ったものから、エスニックなインドネシアの風車で、どれも見る者を惹きつける個性に溢れたものだ。

一番小さいものは、二センチほどのブリキ製で息を吹くとクルクル回るもので、明治から大正時代に流行したものとかが。可愛らしさでは、竹を編んで千代紙を貼った髪飾りの風車や、笛のついた風車、耳かきについた風車などもある。



大和屋先生はスケッチ

旅行で十数か国を訪

ているが、その度に風車を探すがもうひとつの楽しみだという。しかし、いつも手に入るとは限らない。

「中国には私も行っているのですが、ここにある北京の風車は実は池袋のデパートで中国展に飾られていた

ものを、お願いして譲っていただいたものなんです」

最近のものでは、インド

ネシアの素朴な風車がある。

これも国内で手に入れたもので、風車が回るたびに木琴のような音が響く。

同じように音が出るものは、オランダのものはオルゴールつき、イタリアのクリスマス風車は小さな金属棒が鐘を打つ仕組みになっている。

こうして、さまざまな風車が大和屋先生の手元に集まってきたが、先生にとっては収集だけが目的ではなかった。

「父は何でも器用に作ってくれましたから、私も子供のころから手作りの楽しさを覚えまして、学校でも随分いろんなことを教えました」

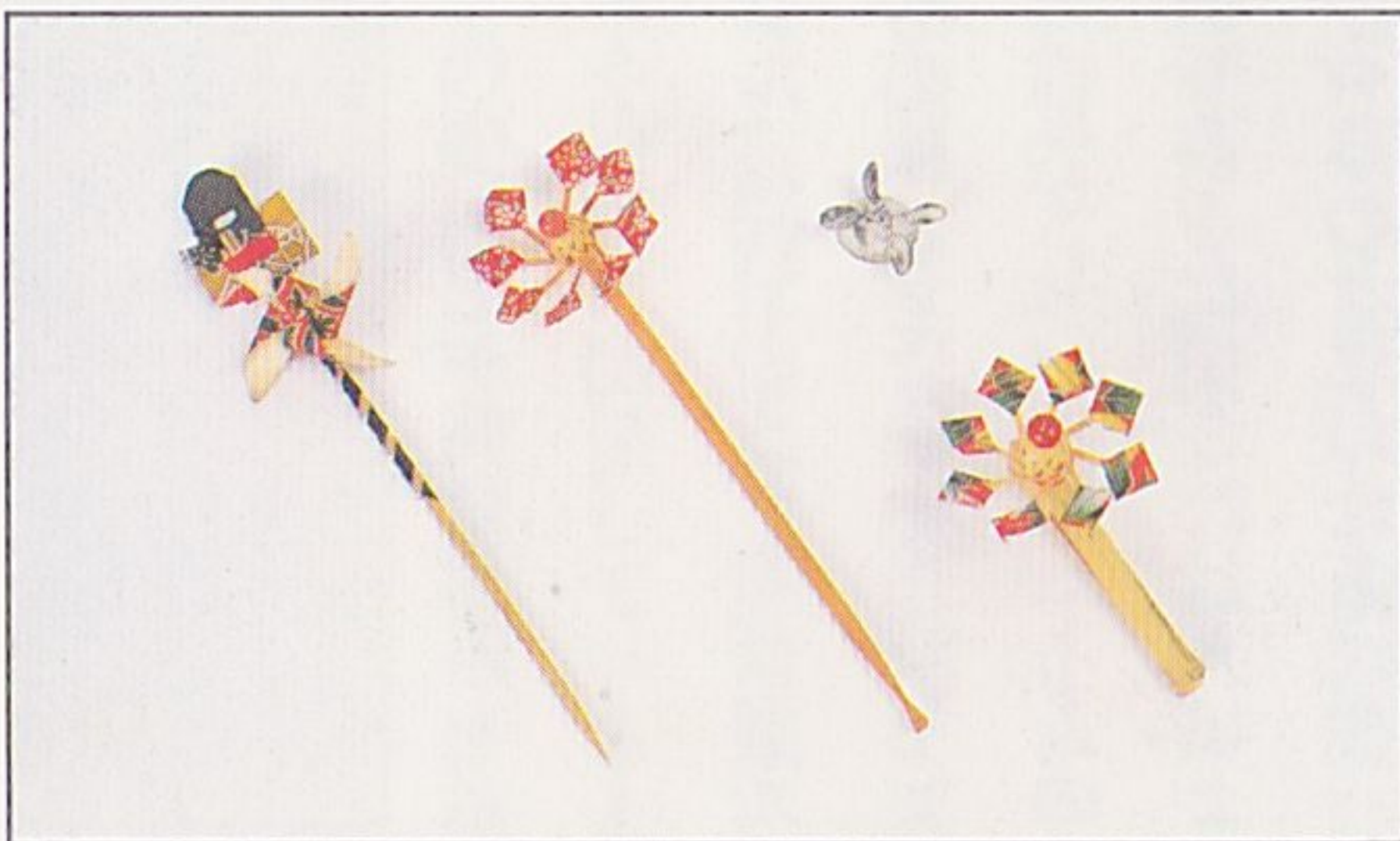
そして『風と水で遊ぶくふう』を出版。この本は、主に風車と水車の作りかたを児童向けに書いたものだ。「子供のときに自分の手でものを作るのは、とても素晴らしいことなんですけどね」

五十年間も教育界に身を置いてきた大和屋先生の思いは、今も子供たちの上に注がれている。そしてまた「いろんな資料を含めて、いつか風車について一冊の本を書きたいと思っていますがね」

といわれるのだった。その夢が実現してほしいと願うのは、私一人ではないだろうと思った。



アメリカ土産の風車。風車が回るとニワトリがトウモロコシをつつく仕組みになっている



左から江戸風車、耳かき風車、ブリキ玩具風車、髪飾り風車